

遊記山人惟愛石
區裏磊落競妍
江南飛花點壽
山琤：好作佳人
珮
難血每憶板林
晚舞點來善行
人袂
田黃玲瓏疑土
德白玉天山冰
破碎
一刀盡起嶺嶺
雲數畫微曲柳
江水
斜平可掬行澆
淡篆書拓自嶧
山背
愆：不盡玉石
命昔自東坡今
遊記
對石晏坐忘古
今石如世上千
萬歲

遊記山人余元也雲外散人為山呈

小弟此詩贈大兄次弟為書之石印

廿七份一詩家書寫也 己 蘭成書

「遊記山人（宮田武義）治印の詩」
雲外散人（吉田吉之助）作
胡蘭成書「昭和40年」

遊記山人惟だ石を愛す、匣裏磊落として妍詭を競う、江南の飛花は寿山に点じ、珩々として好く佳人の珮を作す、雞血は毎に憶う楓林の晩、舞麩し来たり行人の袂に着く、田黄は玲瓏土徳と疑い、白玉は天山の氷破砕、一刀轟起す鷺嶺の雲、数画微曲す柳江の水、蚪斗は行潦の涔に掬す可く、篆書は嶧山の背より拓す、悠悠尽きず玉石の命、昔は東坡より今は遊記、石に対して晏坐して古今を忘る、石ぞ知る世上千万歳。

遊記山人は余の兄なり、雲外散人を小弟となす。小弟詩を作って大兄を讀し、次弟ために之を書す。世上紛々の詩家書家を怕れざるなり。

乙巳 胡 蘭成

有由有縁

吉 田 吉 之 助

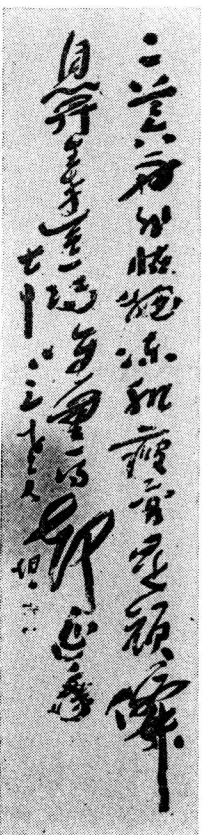
表紙の篆刻「有由有縁」は遊記山人・宮田武義氏の近作で、その原寸による。

手に入れた佐藤一斎の書幅を床の間にさげて眺めていると、こんなふうに読めるようになった。

二首六身 怪物に非ず
凍飢瘦骨 是れ頑仙
自算 生来一得なし
唯だ一得なければ
却って年を延ぶ

七十三老人 坦
一斎七十三歳の作で、坦は実名である。訳してみると、「首が二つで身が六つ、そんな姿

になりけるが、怪しいものではござらぬぞ。うらぶれ果てて骨は瘦せ、肌は凍る身なれども、これぞ頑固な仙人と、儂は自分こそう称んで、つくづく生まれ来し方に、思い馳せれば無一物。何もなければなかなか、この世の旅は長閑なり」、



佐藤一斎「二首六身詩」

ということになる。

一斎は、首が二つで身が六つという異体のものが怪物ではないと云うけれども、こういう酔いも甘いも噛みわけた頑固な老人は、何を云い出すやらわからない。それは「百鬼夜行図」などにあらわれている物の怪であろうか。または、出雲の八岐の大蛇か、源三位頼政が射止めた鶴のような歴史上の怪物であろうか、などと思いをめぐらしていた。いや、幕末の頃の湯島天神や神田明神のお祭には、さまざまに見世物が出張って来ていた。その小屋がけの一つに、「サアサアお代は見てのお帰り、親の因果が子に報い、頭が二つで胴体が六つ、世にも珍らしい二首六身の怪物。あ

蘇我時老風王孫秋酒成
仙殿十春過客不勞翰中子
惟書亥字與時人 辛亥年

その頃私は、宮田武義氏（遊記山人、山水楼主人）に誘われて、清水董三（東翠）先生指導の墨雅会に加わり、中国古碑の臨書をやっていた。ある日、怪物の正体をあばかんと、この佐藤一斎の軸を携えて墨雅会に臨み遊記山人の書いて来た半折の書と並べてかけた。遊記山人の書は晩唐の詩人、李商隱（義山八一三〜八五八）の七言絶句で、それは次のように読めた。

蘇台の駅吏 風塵に老ゆ

酒に耽り仙を成す 幾十
春
過客 甲子を詢うを勞せ
惟だ亥字を書して時人に
与う

李義山「王全詩」遊記山人書 東翠先生と遊記山人が、その両方を打ち眺めているうちに、異口同音に膝をたたいて、「二首六身は△亥▽の字のことだ」というのである。亥字の説明はあとまわしにして、その詩を訳してみよう。

蘇台駅のお爺さん、うらぶれ果てた老の身を、酒にまかせて幾十年。行き交う人は語れもど、いつも変らぬ仙人の、年をきくよな者はない。問われるまでに人々に、亥の字を書いてくれている。

この詩の原形には次の題詞と注がついている。

戯れに稷山の駅吏・王全に題贈す。
全、駅吏となりて五十六年、人、道術ありと称す。往来多
く詩章を贈る。

稷山は古い時代には絳県の名があり、そこには城があったので、義山は絳台と称んだ。この老駅夫は当時、人々の目にとまっていたらしく、行き来の人たちが書いたものを贈り、詩文で名高い李義山もまた詩を作ってこの人に贈った。

さて、清水東翠、宮田遊記両先生の示教に基づいて、亥の講釈をすれば、次のようなことになる。

亥は十二支のいのししにあたる字である。古い時代に溯って、いのししの詮義をしてみると、BC十四世紀からBC十二世紀頃、殷が都した河南省の安陽附近から、近時、その時代の遺物が発掘されて、その中から、亀の甲や獣骨に字を刻ったものが沢山出て来た。この時代の文字を甲骨文というが、その刻文はみな易占いの卜辞である。文を刻りつけた亀甲や獣骨を火にあぶると、色が変わったり、罅ができる。その変化の具合によって、天候、収獲、狩猟、旅行その他万般の吉凶を判断した。だから、甲骨文には年月日をあらわす干支の甲亥や丙亥などの亥の字が出てくる。

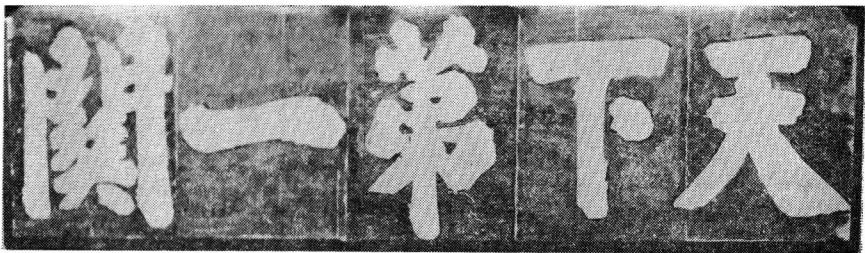
それとともに豚の古字の「豕」の字も出て来て、「貞う、往いて豕を逐う、獲んか」（豕狩りに出かけようと思うが、獲れるであろうか）などの文も見られる。これから推すと、当時はまだ豕（豚）と亥（猪）の区別がなく、野生が主で、

野に出て子豕などを生けどって来て飼うことはあったらしいが、専ら家畜として養うことはなかったようである。そして、「逐う」という字は、豕にしんにゅう（）をかけた会意文字となっているところを見ると、足の疾い野馬や鹿を追いまわして、取り逃して馬鹿をみるよりは、多産で鈍感な豕を逐いかけた方が効率的であったように思われる。

それから周の時代に移って、中国で最も古い詩集の詩経に「豕あり蹄を白くし、悉波を渉る」（小雅、漸々之石）という句がある。これは世が乱れて戦がたえまなく、雨に煙る月夜に軍勢が河を渉って行く。ちょうど、野豕の群が白い蹄で波を蹴立てて、河を渉るさまを思わせる。ああ、いつの日か戦が終わるであろうか、と庶民が嘆く心情を歌った詩の一句である。

豕の字は亥と同じく、もとは「いのしし」の象形から出た字であるから、殷の亀甲文も周の金文も両字のかたちはよく似ているが、少し区別がつけられていて、亥の方は十二支に用いられ、豕は動物をあらわして、両方それぞれに使い分けられている。

「亥豕の譌」という言葉がある。譌はいつわりという字で、亥と豕の両字はよく似ているので、字の見誤りという譬えに使われている。この語源は周末春秋の頃（BC五五〇頃）、孔子の弟子の子夏が衛の国を旅している時、その国の人が史書を読んで聞いているのを聞いて、「晋師、三家河を渉る」と



「山海関題額拓」かつ吉水道橋店

読むので、それは「晋師、己亥河を渉る」と読むべきものだ、と子夏が注意した故事から出たものである。この時代の文字―籀文（大篆）―の三と己、豕と亥の字形がよく似ていたからである。この誤読といい、さきの漸々の石の句といい、西紀前大陸の山野に豕が群をなして河を渉って放浪する風景を想見することができる。

それから下って、秦が天下を統一する（BC二〇〇頃）と、始皇帝は文物制度の改革を行い、度量衡の改正や文字の改定に力をいれた。この時に定められた書体を、周時代の篆文に対して小篆というが、中国では字体の基礎をこの時代の書体におくのである。始皇は天下第一関（山海関）を起点に、万里の長城を築いた有名な専制君主であったが、自分の治績を後の世に

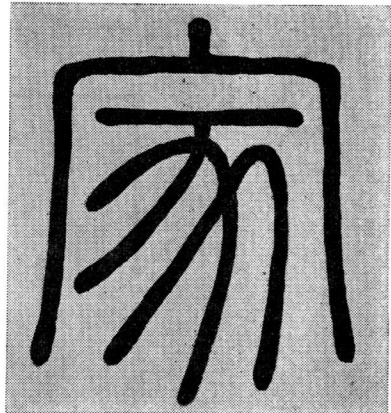
残すべく、天下を巡幸して各地に頌徳碑を建てた。それ等は宰相の李斯の書になるといわれている。有名なものに嶧山の刻石、瑯邪台の刻石および泰山の刻石がある。その残欠（字の残った部分）の中に「刻」の字と「家」の字がある。家の字の「（屋根）」の下には、古い時代の豕か亥かわからぬような形のものとはちがって、この時代になると正式の豕が鎮坐している。家の中に人がいないで豕がいるのはおかしいことだが、この字形から考えてみると豚というものが、犬や猫、馬羊牛などの動物よりも一層、中国人の生活を支える重要な役目を果たして来たことを物語るものであろう。

その頃の亥はどんな字形をしているかというに、前記嶧山碑にある「刻」の字から亥の字形を見ることが出来る。亥は牙があってその牙で土を掘るところから、亥に「立刀」を配して刻るとしたものである。

この亥の字は、首の部分が「二」で、身の部分の左側に「L」、その右側に「イ」が二つ並ぶ、と古来から読まれている。中国では古くから民間取引の符号に号馬（haoma）というものがあり、この符号は、時代により、また土地柄により多少違ふけれども、その一例をあげると、 123456 （或は 6 ） 789 となつてゐる。これに基づいて、亥の字の身の部分のLを上、イをTと読めば、首の二から読み下して二六六となる。また、このほかに、別の読み方もある。それは亥の字の二首の下の身部に三つの「人」を重ね、人は二画

だから、三つであわせて六画、だから二首六身、というものが、その人を号馬のTと読み、三つで六六とするものもある。このほかにも亥を二首六身と読む説はたくさんあるが、とにかく亥が二首六身であることには変わりがない。

この二六六を二千六百六十六句、つまり二万六千六百六十日と読み、これを三百六十五日（一年）で除すと、七十三年と余日となる。従って亥字を書して時人に与えていた官吏の年令は七十三歳。佐藤一斎も落款に示す



嶧山刻石の家と刻の字、会津八日蔵本よりの双鉤填墨

ように七十三歳の亥寿をむかえてこの詩をつくったのであった。

日本で二首六身の詩を詠んだ佐藤一斎（一七二一〜一八五九）という人は、美濃岩村藩出身の儒家であつて、本来ならば、その号の示す如く、一つの書齋に閉ぢこもつて、徳川時代の儒学の直流と目される朱子学一点張りの人であるべきに、陽明学（欧陽明）にも詳しく、陽朱陰王と評され、道家（黄老莊）にも深く、更に泰西民物漏刻器械（漏刻は時計、器械は機械器具）の細にも速んでいた学識であつた。そして、江戸幕府流の思弁をこえた経綸の持ち主で、頼山陽、大塩中齋、渡辺華山など反幕系の人たちとも親交があつた。当時、全国の大小名や勤王家などに薫陶を与え、子弟三千といわれていた。その思潮は明治維新を推進する原動力となつたといわれる。

一斎は亥寿を目前にひかえた七十歳の時、幕府に徴されて、幕学の大本山・昌平齋に出仕を命ぜられたのだが、幕末の天下騒然としてその帰趨を知らない時代に、この狂瀾を既倒に廻し得る者は、この人を措いて他にないとの見通しから、幕府は佐藤一斎を起用し、従来からの林羅山の朱子学系に新息吹を吹き込ませようとしたのであつた。その際、心ならずも出仕を承けて仕途についた一斎の腹の中に、ムラムラと現われ出でたものは、世相を超越した不死身の怪影ではなかつたらうか。首を齧られても、もう一つの首が残り、腹を切つて

も、別の腹がまだ残る怪物ではなかったろうか。七十歳の新任サラリーマン・一斎は、「世間多少營々の者、知るや否や此の翁真に憐れむべきことを」と詠って仕途についたが、その腹は、千年前の絳台の駅吏・王全の道術的渡世に根をおいたものであったろう。その境地ゆえに、天下の帰趨をよく弁別できたのであったと思う。一斎の二首六身の七絶は、義山の詩をよくふまえたものであることがわかる。

さて、宮田さんがなぜに「王全亥字」の詩を書いて来たかということには理由がある。この人は、後輩であるわれわれの面倒見のいい人で、とんかつ屋の私のために、ちょうど義山が王全に詩を作って与えたように、いつも亥や豚や、その他、料理に関する詩章を好意をもって書いて贈って下さる。唐の李義山は宋の陸游(放翁)と共に宮田さんの好きな詩人だから、義山の前記の詩は宮田さんの書跡を通じて、いつかは私のところに廻り来る可能性のあるものだったのだが、一斎の詩と、一斎がふまえた義山の詩とが、こうも間髪をいれずに鉢合わせしようとは、夢にも思えることではなかった。縁の字には冢がついているが、豚の取りもつ縁というものか、また二首六身の物の怪の仕業で



劉石庵書

あろうか。近頃、遊記山人の故郷の比婆山(別名を遊記山という)に怪物が神出鬼没するという噂がたち、このせつ、中国山脈の奥地が観光客で賑わっているというが、そんな遠いところまで出かけずとも、丸の内の山水楼へ行けばその親分に面会できる。

昭和二十年一月二十七日の帝都大空襲の時、自家山水楼に直撃弾を受け、多くの犠牲者を出したのだが、その際、三階から地下に陥没した宮田さんは、死のきわに無意識のうちに十句観音経を唱えていたらしく、その微音をたよりに救出されたという。宮田さんが掘り出された焼け跡に、平素奉祭していた「慈航観世音菩薩」の磁像が無疵で直立現前したということは有名な話である。観世音菩薩に信仰の厚い宮田さんは、この観音像を奉安する堂宇を泉岳寺境内に建立したり、また、甲州八ヶ岳山腹の観音平に「南無観世音菩薩」の碑を建てたりした。その泉岳寺のお祭も、八ヶ岳の観音祭も十年を超えて行われ、通算百数十回の祭の日に雨らしいものが降ったためしがない。宮田さんを、人称んで「天気男」、または「宮田観音」

とする所以である。

この人は石を愛し印を刻る。最近、「石に寄す」という一文を草し、その中に、「あるとき、墨雅会の席で、わたくし



富岡鉄斎書

は床の間に劉石庵の真蹟八石は米顛の袖裏より出で、詩は摩詰の画中来たるVの軸を掛けていたら、かつ吉の吉田雲外居士が御岳登山の土産だといって、小石をくれた。まことに奇縁である」と書いている。そんなふうには石に愛着をもつ宮田さんのために、私はかつて、「遊記山人治印詩」をつくり贈ったことがあった。この詩は胡蘭成氏(汪精衛親日政府の閣僚で目下日本へ亡命中)の冊正を受け、氏の書になるものが現に私の手許にあるが、胡氏はこれに賛して曰く「遊記山人は余の兄也、雲外散人を小弟と為す。小弟詩を作つて大兄を讀し、次弟ために之を書す。世上紛々の詩家書家を怕れざる也」と。これは昭和三十九年のことであつた。はじめ宮田さんによって引きあわされた胡蘭成さんとは、こ

んなことで一層親しくなった。

昨、昭和四十五年の春、私の三女が結婚してハワイへ新婚旅行に発つ際、新夫婦は宮田さんから観音様のお守をもらった。フラダンスを見物している夜、フト拍子を送っている手の指環を見ると、ダイヤモンドがとれているのがわかつて、おどろいて探そうとして立つと、座席の脇のところに光を放っていたという。金剛石はもともと石だから、宮田観音の功德が特別にあらわれたのであって、もし真珠や琥珀だったら出ては来なかつたであらう、と、じょうだんを云い、観音様のお守のない新婚さんの指環から抜け落ちる宝石も簪で掃くほどあらうから、フラダンス場の掃除人夫を志願して夫婦で雇ってもらえばよかつた、と、罰あたりのことを云って笑つた。宮田さんへのお土産がバイナップル一個では、申し訳ない次第だつた。このお守は、自動車の運転免許証に、色も形も甚だよく似ている。交通違反で免許証呈示を促された時に、間違つてこのお守を出した、うちの息子は、お巡りさんが「慈航」を「自交」と解釈してくれたのか、「若いのに心掛けがよらしい」と、かえって賞められたということで、その後チョイチョイこの手を試みているそうである。これがまた妙に効くと云っている。

宮田観音の御利益というものは、私の身边にはまだ沢山あるが、続々と奇蹟や奇縁を醸し出す不思議な力は、神通力というような神がかり的なものでもなく、靈氣というような魔